

Q: 水稻育苗期に発生する病害には、どんな種類があるのですか？

A: 育苗期に発生する病害には大きく分けて、種子伝染性病害と土壌伝染性病害の二つがあります。種子伝染性病害とは、種籾にもともと病気が付着していて、浸種～催芽時あるいは出芽時に病気が広がってしまうものです。一方、土壌伝染性病害とは、もともと土壌中で腐生的に生存しているカビが育苗培土中で増殖してしまうために発生する病気です。近年では箱育苗に人工培土を使用することが多いため、折衷苗代・畑苗代に比べ、苗立枯病等の土壌伝染性病害は大幅に減少しましたが、それでも育苗ハウス床土の病原菌の密度が増加したり、適切な土壌pHではない場合には発生がみられます。

Q: 種子伝染性病害について詳しく教えて下さい。

A: 北海道で気を付けなければならない種子伝染性病害は4種類あります。

1) 褐条病:

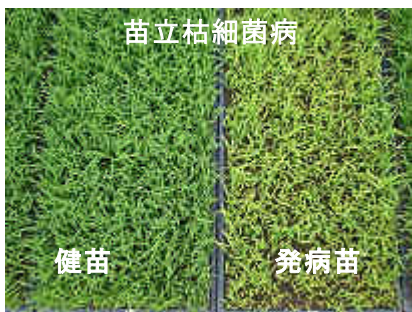
病原菌は細菌の一種です。本病の典型的な症状は苗の地際部から上方に向かって伸びる黒っぽい「すじ(条斑)」です。その他に幼苗の腐敗、苗の不揃いも引き起こします。また、本病は循環式催芽により発病・感染が助長されます(高温で好気的な条件が本菌の増殖を格段に助長します)。

近年、北海道のクリーン米推奨により、化学農薬を使用しない温湯消毒が増加する傾向にありますが、本病は温湯消毒のみでは防除効果は不安定とされています。十分な防除効果を得るためには催芽時の食酢との組み合わせ、あるいは生物農薬との組み合わせが必須と考えられます。蒸気催芽の場合には食酢は使用できないため、生物農薬との体系が好ましいと考えられます。



2) 苗立枯細菌病:

病原菌は細菌の一種です。本病に感染すると、苗は萎凋し、葉色は黄～白色を呈します。本病は高温・多湿を好む性質があり、病原性も極めて強く、育苗時の灌水により周囲に拡大する可能性がありますため、十分な注意が必要です。



2) ばか苗病:

病原菌は糸状菌(かび)の一種です。本病に感染すると、苗は黄化徒長し、育苗箱の中で目立つ存在となります。なお、重症苗は枯死する場合があります。本病は感染しても育苗中周囲に拡大する危険性は低いですが、感染苗を本田へ持ち込んだ場合には次年度の種籾が病気に汚染される可能性が高いため、特に採種圃では感染苗を持ち込まないよう注意が必要です。



3) いもち病:

病原菌は糸状菌の一種です。本病は一般的には本田で7月中旬頃から発生しますが、汚染された種籾を使用すると育苗中に発生する場合があります。感染苗を本田へ持ち込んだ場合には本田でのいもち病発生源となりますので、持ち込まないように十分な注意が必要です。



Q: 種子伝染性病害に対する新薬剤はありますか？

A: 弊社では新しい水稲用殺菌剤として生物農薬「タフブロック」をH21年より上市しました。タフブロックは催芽時種子浸漬によって、褐条病、苗立枯細菌病、ばか苗病、苗いもちの発生を抑えます。また、現在、土壌伝染性病害の苗立枯病(リゾプス菌, フザリウム菌)にも適用拡大を予定しており、水稲用生物農薬として総合的に高いポテンシャルを持つと考えております。また、温湯消毒との組み合わせで更に安定した効果が期待できます。

皆様ご愛顧の程宜しくお願い致します。

(2008年4月 ドラ吉記)



参考文献

- ・「日本植物病害事典」 全国農村教育協会
- ・「北海道病害虫防除提要」 北海道植物防疫協会
- ・「北海道における農作物および観賞植物の病害誌」 北海道率中央農業試験場